



12月の健康コラム

Vol. 117

病院で出してもらった薬と市販薬の違いと使い分け

▼医療用医薬品と一般用医薬品

病院や医院など医療機関で、医師の診断のもと発行された処方箋により薬剤師が調剤した薬を「医療用医薬品」といいます。

これに対して薬局や薬店・ドラッグストアなどで、処方箋なしに買える薬を「一般用医薬品」および「要指導医薬品」といいます。一般用医薬品や要指導医薬品は、OTC(Over The Counter)医薬品、市販薬や大衆薬と呼ばれることもあります。



医療用医薬品

作用や使用方法などの点で医師や薬剤師などの専門家による管理が必要であり、大部分に保険が適用されています。医療機関や保険薬局で調剤を経て受け取る薬は、患者さん一人ひとりの体質や症状に合わせて種類や量が決められるので、処方された人以外は服用できません。処方された薬は、医師の指示に従い、用法・用量を守り、医師の指示を受けずに保管して自分の判断で使用したり、他の人に譲ったりしないでください。

なお医療用医薬品と市販の薬(一般用医薬品・要指導医薬品)で同じ効果を表示している場合でも、成分や含量が異なったり、効き方や効き目が異なることがあります。医療用医薬品の効能・効果を知っているからといって、自分の判断で市販の薬の代わりに使うようなことは絶対にしないでください。

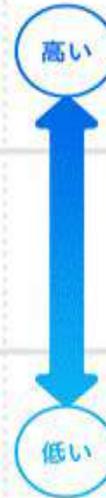
一般用医薬品・要指導医薬品



一般の人が薬剤師や登録販売者のアドバイスのもとに薬局やドラッグストアなどで購入し、自分の判断で使用する薬です。成分の種類や含有量などの観点から、指示されている用量の範囲では比較的安全とされています。使用に際しては、使用量や使用方法をわかりやすく記載した説明書(添付文書)がついていますので、必ず読むようにしてください。

一般用医薬品にはリスクに応じた3つの区分があります。それぞれ販売時の陳列や薬剤師等の専門家の関わり方、情報提供の仕方が決められています。例えば、一般医薬品はインターネット等での通信販売が認められていますが、要指導医薬品は、リスクが高いもしくは確定していない医薬品であり、薬剤師から対面で指導を受ける必要があるため、認められていません。

分類	取り扱い	リスク	ネット等 通信販売
要指導医薬品	医療用に準じた医薬品です。一般用になって間もなくリスクが不確定なものや、劇薬などがあります。自由に手に取ることができない場所に置いてあり、薬剤師から対面での指導・文書での情報提供を受けた上で購入できます。 <ul style="list-style-type: none"> お薬の例 一部のアレルギー治療薬、劇薬、むくみ改善薬 など 	不確定 もしくは 高い	×
一般用医薬品	第1類 医薬品	自由に手に取ることができない場所においてあり、薬剤師からの指導・文書での情報提供を受けた上で購入できます。 <ul style="list-style-type: none"> お薬の例 胃腸剤（H2ブロッカー）、ニコチン貼付剤、一部の育毛剤 など 	○
	第2類 医薬品	薬剤師又は登録販売者は、情報提供に努めなければいけません。特に依存性のあるものなどは「指定第2類医薬品」として区別されます。 <ul style="list-style-type: none"> お薬の例 主な風邪薬、解熱鎮痛剤 など 	○
	第3類 医薬品	薬剤師又は登録販売者による情報提供についての義務はありませんが、疑問点などがあれば積極的に説明を受けましょう。 <ul style="list-style-type: none"> お薬の例 主な整腸剤、ビタミン剤 など 	○



<薬剤師>



薬剤師とよく相談しましょう

国家資格を持った薬の専門家です。

医薬用医療品、要指導医薬品、第一類医薬品を含めた、すべての医薬品を取り扱うことができます。

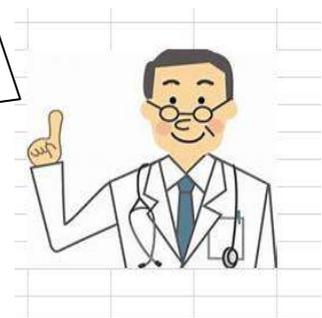
<登録販売者>

都道府県知事が資格認定した、薬の専門家です。第一類医薬品を除く一般用医薬品を取り扱うことができます。

一般用医薬品・要指導医薬品は、「健康の維持増進」「病気のかかりはじめと思われる体調不良の初期治療」「原因が明らかな慢性疾患の症状緩和」「環境衛生」などを目的に使用します。

ほとんどは、疾患を治すわけではなく、症状を改善する薬です。

従って初期治療として支持された期間にクスリを服用しても治らない場合は、医療機関への受診を要します。



薬を購入の際は、疾患やアレルギー、すでに服用中の医療用医薬品やサプリメントがある場合は、薬局やドラッグストアですべて伝えるようにしてください。薬の成分は、他の薬、サプリメント、食品との組み合わせによって、効き目が強くなりすぎることや、逆に効かなくなることがあります。一緒に服用してはいけない薬はないか、食べてはいけないものはないか、説明書(添付文書)をよく読んで確認してください。

組み合わせに注意したいくすりの例

抗生物質 + 胃腸薬	抗生物質の効き目が悪くなることがあります。
ワルファリン(抗血栓薬) + 風邪薬、解熱鎮痛薬	心筋梗塞や脳梗塞の治療でワルファリンを服用している人は、併用すると作用が強まり、血が止まりにくくなります。
鼻炎薬 + 胃腸薬	鼻炎薬に含まれる抗ヒスタミン剤と、胃腸薬に含まれる鎮痛鎮痙成分は同じ作用を持つため、併用すると口が渇きすぎたり便秘になったりします。



組み合わせに注意したい食品の例

お茶	タンニンがくすりの成分を変化させて、効き目を低下させることがあります。
コーヒー・紅茶	カフェインが含まれているくすりと一緒に服用すると、カフェインの取りすぎで頭痛などの副作用を起こすことがあります。
アルコール	風邪薬や催眠鎮静薬などに含まれる抗ヒスタミン剤の作用を増強し、強い眠気を起こしやすくなります。アスピリンと一緒に服用するとアルコールの吸収が高まり悪酔いしやすくなります。
牛乳	カルシウムがくすりの吸収率を低下させることがあります。
ジュース類	果汁の酸性が制酸剤の作用を弱めることがあります。 グレープフルーツに含まれる物質がくすりの作用を強めてしまうことがあります。
セントジョーンズワート (ハーブ)	くすりの代謝や分解にかかわる酵素に働き、効き目を弱めることがあります。

